

# 東方學

第百二輯

平成十三年七月 東方學會

東  
方  
學  
第  
百  
二  
輯

平  
成  
十  
三  
年  
七  
月

TŌHŌGAKU

(Eastern Studies)

Edited by  
The Institute of Eastern Culture  
No. 102 July 2001

Contents

Articles:	Page
Sung urbanism revisited, SHIBA Yoshinobu .....	1
From "lenient rule" ( <i>k'uan-chih</i> ) to "severe government" ( <i>meng-cheng</i> ), WATANABE Yoshihiro .....	20
Bodhiruci's three lost works, ŌTAKE Susumu .....	34
A study of the <i>Pang</i> documents among the Tun-huang manuscripts, SAKAJIRI Akihiro .....	49
Ou-yang Hsiu's anti-Buddhist stance and the compilation of the <i>Hsin</i> <i>T'ang-shu</i> "I-wen chih", AITANI Yoshimitsu .....	63
Zaydi <i>Hijras</i> in Yemen in the late eleventh and early twelfth centuries: With a focus on the <i>Hijras</i> of the al-Mutarrifiya, KURIYAMA Yasuyuki .....	92
Notes on Eastern studies at home and abroad (101): In memoriam Prof. Marius B. Jansen, MIYANO Hiroshi .....	93
Participating in the 19th International Congress of Historical Sciences (6-13 August, 2000, Oslo), KISHIMOTO Mio .....	110
The 43rd Meeting of the Permanent International Altaistic Conference (3-8 September, 200, Lanaken), MIYAWAKI Junko .....	118
The late Prof. Iriya Yoshitaka (1910-1998): Reminiscences by KINUGAWA Tsuayoshi, KŌZEN Hiroshi, MATSUO Yoshiki & MIZOGUCHI Yūzō .....	127
In memoriam Dr. Prof. Yamamoto Tatsuro, by KANDA Nobuo, NAKANE Chie, IKEDA Ori, KARASHIMA Noboru, SAKURAI Yuhio, Jacques GARNET & György HAZAI .....	153

Published by the Tōhō Gakkai

(The Institute of Eastern Culture)

4-1, Nishi-Kanda 2-chome, Chiyoda-ku, Tokyo

## 第四十三回國際アルタイ學會

宮脇 淳子

二〇〇〇年九月三日(日)から八日(金)まで、常設國際アルタイ學會 (Permanent International Altaistic Conference、通稱 P I A C) の第四十三回會議が、ベルギーのオランダ國境近く、ラナケン Lanaken のシャトー・ピーテルスハイム Chateau Pietersheim で開催された。私は、夫の岡田英弘・東京外國語大學名譽教授とこれに参加し、研究發表を行った。岡田は一九九五年に第三十八回會議會長となつて、この國際アルタイ學會を日本に招聘しており、その際、私が書いた報告を、本誌『東方學』第九十二輯、一九九六年八月、一四七―一五五頁に掲載していただいたことがある。

前年の一九九九年八月チェコのプラハで開かれた第四十二回會議は、われわれは参加直前にキャンセルした。同年四月二十一日朝、岡田が突然脳梗塞で倒れて、言語障害を起したからである。朝起きた時にはすでに呂律がまわらなくなつており、駒込驛前(北區中里)の自宅から救急車で千駄木の日本醫科大學付属病院に運び込まれた時、自分の名前がようやく言えるだけだった。幸い、處置もよく、右半身の麻痺が軽かつたので、一ヶ月後に退院し自宅療養になったが、ことばの出にくい喚語障害はずつと残つた。日本語も英語も、聞いたり讀んだりした時には理解できるのだが、自分から話す

のはかなり困難だった。プラハで第四十二回國際アルタイ學會が開催されている時も、毎週通院して、言語聴覚士のもとで懸命にリハビリテーションをしている最中だった。

會議の最終日、Eメールで、われわれのコンピュータに、岡田がこの年の P I A C ゴールド・メダルを受賞したという連絡が入つた。通稱 P I A C メダルとも呼ぶこの賞は、正式にはインディアナ大學アルタイ學賞 (Indiana University Prize for Altaic Studies) という。生涯を通じて、世界のアルタイ學に貢献したと認められる學者に贈られる榮譽ある賞で、一九六三年第一回の受賞者は有名なモンゴル學者アントワヌ・モスタールト Antoine Mostaert である。それ以来、該當者なしの年もあるが、おおむね毎年一人、世界中の著名なアルタイ學者に贈られてきた。その後「ヘーニッシュ Erich Haenisch (西ドイツ)」「リンチェン Rinchen (モンゴル人民共和國)」「ネーメト Gyula Nemeth (ハンガリー)」「レネン Martti Rasänen (フィンランド)」「リサデテ Louis Ligeti (ハンガリー)」「クロンシグ Sir Gerard Clauson (イギリス)」「ニコラス N. Poppe (アメリカ)」「フォン・ガズマン Annemarie von Gabain (西ドイツ)」「ジーンツ・ウス V. I. Cincius (ソ連)」「フックス Walter Fuchs (西ドイツ)」「ラティエ Owen Latimore (マ

メリカ)」「ヤーン Karl Jahn (オランダ)」「コンノフ A. N. Kononov (ソ連)」「ヤンナ Gunnar Jarring (スウェーデン)」「ボート John Andrew Boyle (イギリス)」「ニココロフ N. A. Baskakov (ソ連)」「ウォルター Walther Heissig (西ドイツ)」「サイナー Denis Sinor (アメリカ)」「メンヤス Karl H. Menges (アメリカ)」「エキアリス J. Joki (フィンランド)」「キョロデー Károly Czegledy (ハンガリー)」「アールト Pentti Aalto (フィンランド)」「クリス Francis W. Cleaves (アメリカ)」「ハンツマン Johannes Benzing (西ドイツ)」「ベジツク Omejian Pritsak (アメリカ)」「シュッツ Edmond Schütz (ハンガリー)」「シチェルバツ A. M. Shcherbak (ロシア)」「ハムルト James Hamilton (フランス)」「リチャード Jean Richard (フランス)」「ポタポフ L. P. Potapov (ロシア)」「ドエファー Gerhard Doerfer (ドイツ)」「トリヤルスキ Edward Tryjarski (ポーランド)」が受賞している。日本人では、モンゴル言語學者の故服部四郎博士が一九八三年に受賞して以来、岡田が二人目である。

名前を刻んだ小さな純金メダル一つ贈られるだけだが、過去の受賞者リストが素晴らしいので、非常な名譽と考えられている。國際アルタイ學會に三回以上参加した実績のあるメンバーが、毎年投票で、三名の賞選考委員を選び、デニス・サイナー Denis Sinor 書記長 (Secretary General) とその年の會長を加えて計五名で受賞者を選ぶ仕組みである。

この受賞は、リハビリテーション中の岡田にとって何よりの励ましとなった。來年の國際アルタイ學會には絶対参加して、みんなに受賞のお禮を言う、と言ひ、不自由な右手でコンピュータにも向

かうようになった。最初は研究發表は無理かと思つたが、かなり早くから英語の論文も準備し、参加を待ちわびていたのである。

今回の會議は、ベルギーのルーヴェン大學のマニ教學者アロイス・ヴァン・トンゲルロー Alois van Tongerlo が會長となつて招聘したのだが、ルーヴェン市は學會を開催するには繁華な都會すぎるから、郊外のシャトーを選んだというので、おかげで、われわれはベルギーの首都ブリュッセルから列車でリエージュへ行き、そこでオランダのマーストリヒト行きの列車に乗り換えて、オランダからタクシードルギーへもどる、という旅程になった。岡田の體調を考慮して、低カロリー・減鹽の機内食を特別注文し、三日前にブリュッセルに着いて、時差の調整をした。ブリュッセルでも、岡田はなるべくホテルで休み、私ひとりでお歩くようにした。

今回の會議のテーマは、「二人のベルギー人神父の滿洲學者を記念して」「アルタイ世界のこの世とあの世、および黙示録觀念 Life and Afterlife & Apocalyptic Concepts in the Altaic World」というものだったが、テーマに関係のない發表をしても一向にかまわない。實際、會議で讀まれたすべての發表が、會議録 Proceedings に掲載されることが決まった。

前年一九九九年にプラハで開かれた第四十二回會議は、チュルク研究者のとりとられた観があつたと聞いたが、この會議の主催者が、レイディオ・フリー・ユーラプ Radio Free Europe のジャーナリストで、トルコ専門家だということも関係していたと思う。

今回は、参加者七十二名のうち、トルコ共和國からの参加十九名と、國別ではやはり最多だったが、これは同伴の夫人三名を含んだ数である。もっとも、アルタイ學はトルコ學、モンゴル學、滿洲・

トゥングース語の總稱で、研究者の數から言うと、トルコ語が半數以上を占めるのは常のことである。

その他の國別の参加者數は、ロシア七名、アメリカ合衆國七名、ドイツ七名、ベルギー六名、日本五名、中國(内モンゴル)四名、フランス四名、オランダ四名、イタリア三名、ポーランド二名、ノルウェー二名、ハンガリー一名、チエルクメニスタン一名であった。ただし、日本五名のうち一名は、アメリカ國籍のロジャー・フィンチ Roger Finch だし、インディアナ大學で博士號を取った中國新疆のカザフ人と、イギリス人と結婚してアメリカの大學で教えているマリコ・ウォルター Mariko Walter はアメリカに含まれ、オランダで勉強中のハワイ生まれの日系三世はオランダに含まれる、という具合である。

さて、會場となったシャトー・ピーテルスハイムは、三階建てのあまり大きくない建物で、寢室は十ほどこなかつたため、参加者はあと二つのホテルにも分かれて宿泊した。一つのホテルは、會場のシャトーから森をぬけて二十分以上も歩かなければならない場所だったそうで、われわれがシャトーの二階の部屋を割り当てられたのは、主催者が岡田の體調に配慮してくれたわけである。

九月三日(日)、午前十二時から午後八時まで、シャトー・ピーテルスハイムで登録(Registration)があり、それぞれ部屋の鍵と、プログラムの入った紙挟みを受け取った。その夜は八時十五分から、庭の別室で、歓迎の夕食會があった。

九月四日(月)、午前九時から午後零時三十分まで、ユービー・ブレイクを皆さんで、恒例のコンフェッションズ Confessions (告白、参加者全員が自己紹介をし、最近の業績について報告する)があ

あった。

岡田は英語で、まず前年の P I A ゴールド・メダル受賞を謝し、ついで病狀について語り、さらに過去二年間の研究内容として『The Mongol Empire and its Legacy』の『China as a successor state to the Mongol Empire』が刊行されたこと、岩波書店の『文學』に「一八二三年のヴァンシーリー・シハイロヴィッチ・コロウニク釋放に関する滿洲語文書の譯と解説を内容とする」樋口一葉舊藏の滿洲語文書を發表したこと、國際モンゴル學會のブレイティンに Hidehiro Okada, Historian of the Mongols: A Bibliographical Autobiography』が出たことを報告した。宮脇は「二年前の P I A C 直後、日本の國際交流基金から派遣されてモンゴル國ウランバートル市に二ヶ月滞在し、國立中央歴史文書館の清朝時代の滿洲語・モンゴル語文書を調査した報告を、アメリカの滿洲學専門誌 *Sakasha* 四號に英文で發表したこと、P I A C 書記長サイナー先生の推薦でジュンガル史の執筆を擔當した、ユネスコから刊行の『中央アジア諸文明の歴史 History of Civilizations of Central Asia』シリーズの第五巻「對照的な發展 Development in Contrast (16th to mid-19th century)」が、ようやく編集作業に入ったことなどを報告した。

さて岡田と私は、當初、P I A C の直前二〇〇〇年八月二十八日から九月一日まで、ドイツのボン大學の中央アジア言語・文化セミナーで開かれることになっていた、第一回國際滿洲・トゥングース學會 1st International Conference on Manchu-Tungus Studies にも参加するつもりであった。この學會の會長は、セッションの主任教授のミヒャエル・ヴァイブス Michael Weiers と、ヴェネツィ

ア・マルラーヴェン Hartmut Walravens (ベルリン國立圖書

館)「バンタ、マ・マルト」及び滿洲學「Bang, de Harlez and Manchu Studies」

スターリ Giovanni Stary (ヴェネチア大學)「ミヤルネ・ド・アルレから現在に至るまでの滿洲シャマン研究の發展」The Development of Manchu Shamanic Studies from Ch. de Harlez till Present Times」

アントノヴァ Elena Antonova (ロシア國立人文科學大學)「ヴァイリ・バンズ・カウフと二十世紀の初めにおけるロシアのオリエンタリズム」W. Bang Kaup and Russian Orientalism in the Beginning of the XXth Century」

以上三つの發表は、今回の會議が記念する、二人のベルギー人神父シャルル・ド・アルレ・ド・ドゥーラン(一八九九年没)と、ヴァイリ・バンズ・カウフ(一九三四年没)の業績に関するもの。

ここで休憩があり、再開後「つぎの發表があった。

岡田英弘「不思議な『トレント・ラトルロ』の原本」Original Version of the Mysterious *Toregut Rareho*: Toyin Gelung Gelung Choghdan's *Umen süstühtü qaghuchin torghud ba, basa ching sedkhitü sh-e torghud ayimagh-un qaghan noyad-yin ugh*

ア大學教授のジョヴァンニ・スターリ Giovanni Stary という、錚錚たる顔ぶれだった。二〇〇〇年二月に届いたファースト・サーキュラーに、早速 Eメールで参加申し込みをしたが、これに對してその後返事がなく、そのうちに四月も過ぎ、五月になって、イタリアのスターリ教授に問い合わせたが、そちらにも何の情報もないという。六月に入り、いよいよ飛行機の豫約が必要になったので、岡田と私はボンの學會への参加を見合わせてベルギーに直行することにし、そのむね斷りを送った。その後、ロシアから歸ったスターリから連絡があった。この學會の眞の組織者カルステン・ネーエル Carsten Näher は、手紙にも返事をせず、電話にも出ないという。七月の初めになって、スターリから「たった今、まったく期待を裏切って、ネーエル氏からセカンド・サーキュラーを受け取りました」との知らせがとどいたが、そのときには旅行の手配もすべて終わり、手遅れだった。

その後、ボンの滿洲學會に出でから國際アルタイ學會に到着した友人たちから聞いた話を総合すると、だいたいネーエルは大学院學生で、これまで國際會議の経験もない。ヴァイアースは擔がれただけだったし、スターリも名前を貸しただけで、ネーエルと面識はなかった。それに悪いことに、ネーエルは、ファースト・サーキュラーを出してから、アメリカに呼ばれていて、七月になって歸ってきて、セカンド・サーキュラーを出した。その間、問い合わせに一切返事を出さなかった。當然、會場や食事など、あらゆる點で會議の組織は最悪で、とうとうある大物の學者がネーエルに面と向かって抗議した。ロシア人は皆、書類が間に合わなくてヴィザが取れなかった、等々である。

*indusin-ni tledekli tuki-yin bichig but*”

「トルゴト・ラレロ」は、スヴェン・ヘディンの探検隊に参加したデンマーク生まれのハスレント・クリステンセン（一八九六一—一九八四）の旅行記に出てくる言葉で、新疆トルゴト族の寺で見つけた古い書物の題名である。その原音は何か解明して欲しいと、かつてフィン・ウゴル學會会長ペンティ・アールト Pentti Aalto 博士から岡田に依頼があった。ラレロはチベット語のゲェルラブ (gyal rabs) (王統) の訛りであること、岡田はすでに一九九六年の第三十九回 P I A C で報告した。その後、新疆で見つけたその書物が、活字體で内蒙古から出版されていることを発見して、第四十一回 P I A C で論じた。今回は、宮脇がモンゴル国立中央圖書館で見つけ、コピーと筆寫によって持ち歸った手書き寫本が、それらより古い寫本であることを論じた。

宮脇淳子「ガルドン・ボショクト・ハーンの母はホシュート族であり、トルゴト族ではない——『モンゴルン・ウク・エキン・テツケ』をめぐって」『Galdan Boshogtu Khan's mother was a Khoshund, not a Torghuud: Considerations about *Mongghol-un ugh ebiiyin teike*』

宮脇の發表は、ジュンガルの君主ガルドンの母がホシュート部のグーシ・ハーンの娘か、トルゴト部のシュクル・ダイチンの娘かという、モンゴル科學アカデミーのツォルモン Tsolmon 女史との論争の第二段である。宮脇説は、十八世紀のチベット語史料「ンクサムシヨハンサン Dpag bsam 'jong bzang」に依據しているが、ツォルモン説が依據した、一九八三年に新疆で発見されたオイラト年代記が、實は一九四五年の著作で、ガルドンの母がトルゴト部

出身であるという傳承は、極めて新しい主張であることを論じた。

ペン「Tatyana Pang (サンクトペテルブルグ、東洋學研究所) 「初代滿洲ハーン・ヌルハチの天の觀念」『The Concept of Heaven of the First Manchu Khan Nurhaci』

滿洲語で天を意味する「アブカ abka」と、中國文獻に出てくる傳統的な「天」の觀念の共通性と相違について、さまざまに論じた。

Confessions と研究發表をしたその夜、岡田は高熱を出し、翌五日は、食事以外は一日中部屋で寝ていた。脳梗塞を起こして以来、まとまった英語を話すのは初めてだったので、知惠熱のようなものだと思ふ。一日寝ていたら熱もおさまり、六日のバスの excursion (遠足) には参加することができた。ちょっと過激なりハブリテーションだったが、おかげでその後の回復は順調で、ライフワークと考えている『蒙古源流』日本語譯注の仕事にも復帰している。

五日(火) 午前 セッション B-1

ミキヤン Ruth Meserve (インディアナ大学) 「狼をよける方法」『How to Get Rid of Wolves』

ミザーヴは、アルタイ系の人々にとっての狼の役割について歴史的に論じた後、狼を捕獲する罌が、シベリアのヤクートと十五世紀のフランスで全く同じ形であることを繪畫によって示した。

ブレント・ヘス Burchard Brentjes (ベルリン) 『キュルテギンは飛び去った』——モンゴルの岩繪(紀元前第二千年紀)に描かれた鳥としての死者の魂「『Küitegin flew away』—The Soul of the Deceased as Bird on Rockpictures (1st millennium B. C.)

in Mongolia”

夫人と参加した年輩の考古學者ブレンティ・ヘスは、モンゴルの岩畫の鳥をスライドで見せて、西方文明との關係などを解説。サイナー書記長が、たった一人の考古學者の参加を心より歓迎するとコメントした。

包祥(内蒙古大学)「内蒙古で最近発見された、元朝のバタン文字を刻した黄金の牌子」『The recently discovered Golden Holy Medal inscribed with Mongolian Basba Characters of the Yuan Dynasty in Inner Mongolia』

包祥は、一九九八年に中國内蒙古自治區ソロン旗で発見された元代のバイザ(牌子)が、世界ではじめて発見された黄金のバイザであることを、寫眞を見せて説明した。書かれている文字は、これまでの鐵製・銀製と同じである。

ヴォーヴィン Alexander Vovin (ハワイ大学) 「契丹・漢字合璧碑文の解讀に関する序説」『A Modest Proposal on Decipherment of the Khitan-Chinese Bilingual Inscription』

ヴォーヴィンは、一三四年の契丹文字と漢字の合璧碑文を使って、契丹文字の解讀を一步進めた。

清瀬義三郎(ハワイ大学)「女直文字に轉寫された長母音——マインギョロ・ウルヒチュンの『女直學』に関する言及」『Long Vowels Transcribed into the Jurchen Script: Comments on Aisin Gioro Uihcun's (Jurchenistics)』

清瀬は、マインギョロ・ウルヒチュン(愛新覺羅・烏拉熙春)を批判して、彼女は歴史言語學や比較言語學について知識がなく、参考文献に自分の祖父と父と自分の文獻しか挙げないと説明した。

五日(火) 午後 セッション B-2

ゲレルト B. Gereltu (内蒙古大学) 『『モンゴル學百科辭典』——中國のモンゴル學研究の新傾向』『The (Encyclopaedia of Mongolia): A New Initiative for the Study of Chinese Mongolian Studies』

ゲレルトは、現在内蒙古で『モンゴル學百科辭典』の編纂計畫が進行していることを明らかにした。これに對してサイナー書記長は、英語の題名を Mongolia Studies とするのはおもしろい、Mongolists とするのはおもしろくないと忠告した。

シヤールキョウ Alice Sarközi (ハンガリー科學アカデミー) 「モンゴルの世における不幸な生活」『Unhappy Life in the Mongolian Underworld』

シヤールキョウは、スライムを利用して、モンゴルの文獻の地獄繪に出てくる道具が、すべて實際の遊牧生活で使用されているものであること、地獄繪に鐵砲が描かれるなど、時代と共に宗教畫も變化することを明らかにした。

フルチャハートル Hurchabatur Solongod (内蒙古出身、獨ヶルン(滯在中)) 「オルヌス地域のマルシヤイ洞窟とチンギス・ハーン崇拜」『Die Arjai-Höhlen im Ordos-Gebiet und Chinggis-Qaghan-Kult』

タタール Sarolta Tarár (オスロ、ハンガリー大学) 「十三世紀のモンゴリアにおける泉の黙示録的な碑銘」『Apocalyptic Iconography on a Fountain in 13th cent. Mongolia』

サロルタ・タタールはまだ大學生だが、十五年前の P I A C から母と参加している。美術を志しており、モンケ・ハーンの治世にカ

ラロルムを訪ねたルブルクの記事にある、パリのウイリアム親方が造った銀の噴水のモデルについて論じた。

ボイコヴァ Elena Boikova (モスクワ、東洋學研究所)「ロシア人の見聞によるモンゴルの葬儀」"Funeral Ceremonies in Mongolia according to Russian eye-witnesses"

ボイコヴァは、モンゴルの葬式について記載したロシア人はコロナヴァただ一人で、彼女の記録した葬儀は、シャマンでなくシュチと呼ばれる人物が執り行うことを述べた。

タタール Maria-Magdalena Tatar (オスロ)「モンゴル語におけるキリスト教の語彙」"Towards a Christian Terminology in Mongolian"

母の方のタタールは、キリスト教の本質を表す語彙が、モンゴル語にどう翻譯されているかを論じた。

六日(水)は、朝食後、バス二臺をついで、トゥルンハウト Turnhout と、ゴウ町へエクスカーション Excursion に出かけた。一七〇年にリエーシユで創設されたベギン會の古く女子修道院と教會堂を見学し、そこにあるフレホルス Brepols と、ゴウ出版社で飲み物とつまみを振る舞われた。フレホルスは、今回の P I A C 會長ヴァン・トンゲルローや會員ツィーメのマニ經典やウイグル文獻に関する専門書を刊行しており、『シルク・ロード・スタディーズ Silk Road Studies』も三巻まで出ている。それからバスで、コレセン ドンク Corsendonk に行き、晝食の後、トゥルンハウトにもどつて、この町ができるきっかけになった、女性領主が狩獵中の滞在地として創ったという城を訪問し、今は裁判所に改装された内部をガイドに案内されてゆっくり見学した。

グリス學會に参加し、清瀬に誘われて一緒に参加したもので、ボンで発表したペーパーを読んだ。中國とロシアに分かれて廣い地域に住むトゥングリス系の人びとの言語を、實地調査した西側の言語學者は減多にいないと、滿洲學のスターリ教授が喜んでた。

七日(木)午後 セッション D 2

リー Li Changgui (内蒙古社會科學院)「ウルジエイト Ujiet (内蒙古社會科學院圖書館)「古代モンゴル人のこの世とあの世に ついて」"On the Life and Afterlife Concept of the Ancient Mongolian People"

エヴェン Marie-Dominique Even (パリ大學)「オールドヌ・モンゴル人の傳統におけるあの世の觀念」"Concepts of the Afterlife in the Tradition of the Ordos Mongolians"

オンソ Françoise Aubin (パリ)「エヴェン教授の發表について」"Postface à la communication du Professeur Even"

エヴェンは参加しなかったため、オンソ女史が二つとも發表した。『オールドヌ語辭典』や『オールドヌ口碑集』で有名なヘルギー人神父アントワヌ・モスタールトの直筆原稿や繪を回覧し、その内容に関する話をした。

ウルジエイト Ujiet「古代モンゴル人の黙示録的觀念」"On the Apocalyptic Concept of the Ancient Mongolian People"

休憩後のビジネス・シーティングで、今年の P I A C ワールド・メダルが中國のウイグル學者耿世民に贈られることが報告された。本人は會議に不参加だったので、ヘルリン科學アカデミーのペーター・ツィーメ Peter Zieme が代わりにその業績を紹介した。サイナー書記長が補足して、「かつて耿世民から古代ウイグル語で書いた

七日(木)午前 セッション E 1  
アルバートフ Vladimir Alpatov (モスクワ、東洋學研究所)「ロシアにおける言語と少数民族——過去、現在、未來」"Languages and Minorities in Russia: Past, Present and Future"

アルバートフは、日本語がよくできる言語學者だが、今回はソ連崩壊後のロシアの各共和国における言語政策について報告した。

マウカヌリ Talant Mawkanuli (ウイモンスン大學)「ジュンガル・トゥヴァ語の存続」"The Survival of the Jungar Tuva Language"

タラント・マウカヌリは、中國新疆のカザフ人で、米國インディアナ大學で學位を取得した。彼の發表のジュンガル・トゥヴァとは、ジュンガル盆地に住居するトゥヴァ人という意味で使用した彼自身の造語だそうで、人口は約七千人。トゥヴァ語はトルコ系言語だが、かれらは最近まで、中國の統計下でモンゴル系として扱われており、モンゴル語の小學校に通わされていたということである。

七日(木)午前 セッション D 1

ファンチ Roger Finch (埼玉大學)「アルタイ諸語におけるシャマン的な用語」"Shamanistic Terms in the Altaic Languages"

ファンチは、シャマンの太鼓のあれこれを話した。

ソンツェヴァ Nina Soltseva (モスクワ、言語學研究所)「モンゴル語と南アジア諸語における位置格」"The Locatives in the Mongolian and in the South Asian Languages"

風間信二郎(東京外國語大學)「トゥンブース諸語における使役形」"On the 'causative' form in Tungus languages"

風間は、ドイツのボン大學で開催された第一回國際滿洲・トゥン

タ手紙をもらったことがある。互いの共通語がこのことばだけだから、自分も同様に古代ウイグル語で返事を出した。だから、現存する古代ウイグル語文書は、数が増えたんだよ」と語った。

會員の投票で、來年のメダル選定委員には、ヘルリン自由大學トルロ研究所長バルバラ・ケルナー・ハインケル Barbara Kellner-Heinkele、ホーランド科學アカデミーのエドワルド・トリヤルスキ Edward Tyjarski、ヴェネチア大學教授ジョヴァンニ・スタリー Giovanni Stary の三名が選ばれた。二〇〇一年の第四十四回國際アルタイ學會は、獨逸ン大學のヴェロニカ・ファン・Veronika Veit 教授が招聘し、ボン近郊のヴァルバーネルク Walberberg で開催されることになった。この時は時期は未定だったが、年末に届いたフアースト・サーキェラーでは、八月二十六日から三十一日に決まった。會議のテーマは、『男は妻にさからえな』(モンゴル G 21074) マルタン世界における女の役割 A Man Should Not Act Differently From His Wife (Mongol Proverb) The role of women in the Altaic World」というものであつた。

常設國際アルタイ學會書記長サイナー先生は、二〇〇一年の四月に八十五歳になられる。書記長の地位も、五年ごとに會員が選舉するのだが、ずっと再選されて、過去四十年間その位にある。日差しのやわらかな午後の時間、會場のビートルズハイム城の前庭で、サイナー先生を圍んで、女性ばかりが集まっていた。みんなサイナー先生に可愛がられた、すでに中堅の研究者たちである。先生は静かに、ぼくは生きてる限り、P I A C のために盡くすつもりだけれど、ぼくが死んだあと、どうするか、みんなも考えなくてはいいよ、とおっしゃった。P I A C 事務局の經費自體はたいしたこと

はない。七百名ほどの會員宛てに、毎年ファースト・サーキュラーとセカンド・サーキュラーを發送する郵送費だけだから。しかし、誰が書記長になるにしても、どこか研究室に所屬して、自分の秘書を持っては續かない。自分はインディアナ大學を退官したあとも、Distinguished Professor という肩書きで、研究室と秘書がつき、學長が代わるたびに、Sinor budget (サイナー豫算) を交渉して得てきたんだと言った。

モンゴルとトルコどちらにも目配りが聞き、アジアとヨーロッパとアメリカをつなぐことのできる人は、サイナー先生をおいて他にいない。少しでも長くお元気で生きていらしていただきたいと願うばかりである。

既刊案内

ACTA ASIATICA : Bulletin of the Institute of Eastern Culture

No. 79 Studies in Modern Japanese Literature

(近代日本文學研究：編集責任 桑川光樹)

2000年9月刊、總頁116、定價4,200圓(會員1割引)

Introduction by the Editor

UCHIDA Michio, Natsume Sōseki in Manchuria and Korea

YAMAGATA Kazumi, Modern Japanese Literature and Christian Writers

KAWAMURA Minato, Postwar Literature and the Asian Experience: With Reference to Three Writers

TOMIOKA Kōichirō, Japanese Literature since World War II: A Perspective on Postwar Japanese Literature

KUMEKAWA Mitsuki, Creativity and Tradition in Poetry: The Case of Nishiwaki Junzaburō

## 先學を語る

—入矢義高先生—



出席  
衣川賢次  
興膳宏  
松尾良樹  
溝口雄三(司會)

溝口 今日、お忙しいところをお運びいただきまして、ありがとうございます。

私は、たまたま名古屋大學で大學院ができました時の最初の入學生で、入矢先生から言え、ご自分が大學院で教える最初の學生ということで、それなりに先生も當時は多分張り切っておられただろうと思いますが、そういうご縁で、東方學會の編集會議で、たしか興膳先生や清水茂先生から「世話役は溝口さんがいい」と言われて、京都の方にもっとたくさんおつき合いの深い方がいらっしゃるのにと、思いながら、僭越にもお引き受けさせていただきます。

ここには、本来は今日は出席していただければ、入矢先生の半身かと思われるほどの存在であった柳田聖山氏」と島田先生が仰っている柳田先生がおいでになるのが、妥當であつたらうし、あるいは十年以上東京で入矢先生をお呼びして毎月研究會を開き入矢先生の禪の言語の學習を引き繼がれた末木文美士さんなんかも、東京の方から入矢先生を見ていただくという上で、おいでいただけたらよかったか